ヨーロッパにおける動物愛護と自然教育をみて

長 澤 實*

ヨーロッパの先進国においては逸早く動物愛護の立法措置がなされ、歴史的にも驚くほど動物愛護が定着している。

日本では、昭和48年に「動物の保護及び管理に関する法律」が成立し現在にいたっているが、動物愛護の歴史も浅く、愛護という言葉に耳にする時、「たかが犬・猫が」といった意識が一般的ではないだろうか。日本では、経済大国、先進国としての位置にありながら、自然保護、動物保護といったことに関する意識と理解が稀薄で、この分野における日本の国際的な評価が低いといえるのではないだろうか。しかし今、総理府は国民への理解と将来を担う子供達の健全でより豊かな成長をめざして、動物保護思想の向上と動物愛護の普及・啓蒙について、関係行政機関、獣医師会や動物愛護団体にに対し協力をよびかけている。

私は動物愛護思想の向上を望む一人として、また川崎市に勤務する獣医師の一人として、市政目標とする「人間都市川崎の創造」の理念のなかに、動植物愛護の教育や自然環境の保全など、人間愛に満ちた明るく優しいゆとりある心を求めたいと考えている。

今回、私は幸運にも海外派遣研修(第2部)6期生として研修に参加し、ヨーロッパの動物愛護を学ぶことができたので、ここにその概要を報告する。

1. これ が 動 物 愛 護 だ …人にも優とも劣らない動物医療と福祉…

1) 英国王立動物虐待防止協会(RSPCA)

世界においてイギリスは、動物愛護王国といわれるように、動物愛護に関する団体は100以上もあるといわれ、なかでも1824年に設立されロイヤルの呼称を冠するRSPCA(英国王立動物虐待防止協会)が有名であり、私は今回その本部を訪問する機会を得た。

RSPCAの本部は、ロンドンのビクトリア駅から南に列車で約2時間、ホーシャムという閑静な町にあり、歴史をうかがわせるレンガ造りの建物であった。事前に訪問の連絡をとっていたサリー・アベリー女史を訪ねると、私のために1日の訪問計画がすでに組まれており、部門ごとのチーフが待機してしてくれた。

RSPCAの組織は、視察部(本部管理、地区指導、インスペクターの養成・教育)、獣医部(ホスピタル、クリニック関係)、野生動物部、産業動物部、動物実験部、法律部、教育部、キャンペーン部、報道部、ヨーロッパ・

リエイゾン部(EC関係)、海外部など16部を擁している。この協会は海外の関係機関への指導と資金援助を行い、EC諸国の動物愛護、保護、教育の統合や、他の団体はもとより文部省、その他、行政への愛護意識の啓蒙指導、教育改革等の働きかけをおこなうなど、国家レベルでも指導的立場にあり、イギリス国内には213もの支部を配置する世界に類をみない最大の動物愛護団体である。

インスペクター(査察官:動物保護法で認められた権

ロンドンのハイドパークにて

* NAGASAWA MINORU; 川崎市衛生局環境食品課
(神奈川県川崎市川崎区宮本町1)

インスペクターの授業風景（緊急時には人の救助も行う）

限を持つ）という資格者を養成しているのもこの協会であり、動物の保護、救護活動、飼育指導、愛護教育などの仕事をおこなわせ、地域の獣医師、警察、学校と協力して愛護活動の啓蒙にあたっている。私が訪問した際、20代、30代のインスペクターの卵達、男女25名の授業風景を見ることができた。ちょうど、人工呼吸法について人形を使った実習中で、警察官の服装に似たユニフォームを着て真剣に取り組んでいる姿が印象的であった。彼らは毎年1,500名の応募者の中から選ばれ、6カ月の養成と3回の選考試験を経て資格を取得するが、国民から信頼され親しまれ、その立場に誇りをもって活躍し、現在250名が各地区の支部に配置されているという。そして、RSPCA日本支部である日本動物福祉協会（JAWS）の獣医師3名（男1、女2）がすでに資格を取得しているという。

インスペクターの仕事ぶりについてたずねると、延々と事例をあげてくれた。

例 1：ある夫婦がペット（犬）を置き去りにして夫婦は旅行にでかけてしまい、これにたまりかねた近所の住民の通報で犬は保護された。飼主は告訴され適切かつ必要な動物の世話を怠ったとして、動物保護法により100ポンドの罰金と動物を飼う資格を剥奪された。

例 2：現在、猫を車でひき逃げした心無い犯人、そして、罪のない犬（年老いたシェパード）を捨てた飼主などを捜索中で、見つけ出して告訴の予定…etc.

こうした事例から、日本では考えられないことでただ驚くばかりであったが、同じ命、生きる権利を持つ動物に対して、われわれ人間達が義務として愛護しなければならないということを強く感じさせられた。

2) 24 時間体制の動物病院

プトニー・アニマル・ホスピタル、ここはロンドン市内のプトニー・イーストにあり、日本では例のない総合的な設備と技術を備えた犬・猫、その他ペットの大動物病院で、医院長を含め獣医師が6名、薬剤師2名、検査技師3名、看護婦（准看護）12名、助手3名、事務

猫の避妊手術中、「ヘルプ ユー」、「ノー サンキュー」…

職3名、インスペクター5名のスタッフを擁している。

院長のホーランドさんから説明を受けた後、自由に院内を見学してよいとのことで、外来の診察室に入った。とても綺麗な女医が診察中で、私の訪問を知っていたらしく軽く手を上げて挨拶し診察を続け、あまりの手際よさに脱帽せざるをえなかった。

診察は患者が話さないぶん当然のことながら飼主にいろいろと質問し問診をとり、診療時間は1件につき約5～6分程で休む暇なく次々と続けられ、診断と治療の手段は臨床検査を優先した適確な治療法であった。この診断方法から考えられることは、患者の症状が比較的に軽症、ベテランの獣医師でも診断がつけにくいということである。このように軽い症状で治療をうけるにcoming患者からは、飼主のペットに対する理解と愛情によって異常を早期に発見することができるなど、家族の一員、コンパニオン・アニマルとしての存在を知ることができる。

急患という連絡で処置室へ行くと、生後2カ月たらずのラボラトリー犬の小犬が足の裏をガラスで切り、かなりの出血で担ぎ込まれており、応急の止血をして前麻酔を済ませ手術が開始されるところだった。手術は全身麻酔で、小犬の気管に手際良くチューブがセットされ、フローセンガスが注入される。この間の獣医師と看護婦の熟練された無駄のない動きと完璧な処置は美事であった。一方、この犬の飼主である大柄な女性は、看護婦から飼育上の注意をここんと指導され、極端なほどのジェスチャーで反省する光景がおかしいほどであった。

このように24時間、さまざまなケースの急患が10～15件、外来40～50件、さらに、入院30件の治療がおこなわれると聞かされた。なお、この病院はRSPCAの附属施設として、年金生活者、低所得者などのコンパニオン・アニマルや救急の慈善診療をおこなっており、治療費は寄附として支払われる。したがって治療費は、たとえ50ポンドの治療費に対して支払い能力が10ポンドであってもそれでもよいことになり、年間所得の確認手続きをして簡単に済ませていた。

ロンドン・ハイドパークで散歩中の犬と遊ぶ子供たち

再三の驚きではあるが、RSPCAはこの病院の他に支部として、1917年にPDSA（無料動物診療所）をヨーロッパ各地をはじめ、南アフリカなどに開設し、現在58施設のPDSAを擁し、各所に120名の獣医師と150名の看護婦などを配置しているという。そして、PDSAは動物医療の他、子供達への動物愛護教育の普及に力を入れ、各地の幼稚園や学校での啓蒙活動を積極的におこなっているという。

わずか1日の研修であったが、イギリス人の動物への愛情の強さを知ると同時に、日本と比較にならないほどに根強く定着した動物愛護に接することができた。

3) うらやましい動物福祉施設(イギリス)

イギリスにおける動物に対する国民の意識は高く、動物は地球上に共に創造された命として同類・仲間・友人・家族、そして今や永遠に社会に深く溶け込んでいる。公園には犬が自由に遊び、親子連れや老夫婦が犬と散歩し、ジョギングの友に、ショッピングには小犬を抱き、繁華街には大きな犬がはなれ、車内には犬と同伴といったような光景は至る所で見られ、想像していた以上であった。

イギリスと日本とは動物に対する意識が極端に違うことはたしかで、イギリスでは野良犬や猫、捨てられたり迷子、交通事故等で負傷した動物を見つけると、見捨てることなく愛護団体が警察に連絡し、保護を依頼するという。動物はこうにさまざまなケースで保護されるか、飼主がやむをえずペットを飼えなくなったり、ペットを虐待したことで飼う資格がなくなったり、家畜として現役を引退したなどの理由で施設に保護される。いわばこのような動物たちのための安住の地、動物保護福祉施設がいくつもあり、これらは公的な行政機関ではなく、すべて国民の愛護団体で作られた施設で、しかも理解ある人々の寄附により運営されているのである。

これがイギリスの動物愛護を導き定着させている大きな誘因のような気がするとともに、日本にはこのような動物の福祉施設はなく、逆に行政が中心になっているこ

所長のバール氏（左）と保母さんのような飼育係りの方々

とに、国民意識の大きな違いがあるように思われる。

そこで、イギリスを代表する3カ所の施設を訪問した。

(1) ゴッドストン・アニマルセンター

ここは、ロンドンの南、サリー地域を管轄する福祉施設として1968年に開設され、20エーカーの敷地と最適な自然環境の中で、完璧なほどに整った犬・猫舎、小犬・猫舎、ケガや病気の動物のクリニックや入院施設を備え、バール所長と事務員2名、獣医師1名、飼育係5名が、犬(250匹)、猫(120匹)、その他(馬、羊、兎、アヒルなど)を保護収容している。

施設にはアドミニストレーター(飼育係：特に資格はない)と称する若い女性ばかり5名の職員が動物達の飼育・管理を担当しており、動物に接する態度はまるで幼稚園の保母さんを思わせるようである。ここに収容された動物は、重傷を負って治る見込みがない場合か、狂暴等の理由以外は処分されることはなく、新しい飼主がみつからないかぎり一生でも保護され、日本のように保護されてから4～5日で処分されてゆく犬猫達のおびえたようすとはまるで違い、自分達の家でくつろいでいるかのようにさえ感じられた。また、これらの動物のうち約70%が飼主の元へ戻るか、貰われていくという。なんともうらやましかぎりである。

さらに、新しい飼主になるための条件として、家族全員が動物好き、1日中誰か家にいる(共働きは不可)、家に庭があること(フラットの屋上での飼育は不可)等が厳しくチェックされ、確認のためインスペクターによる調査をおこなっているという。

施設の収入としては、警察によって保護された動物を保護すると警察から1匹につき7ペンスの飼育料、飼主が引き取りにきた場合は飼主から20ポンド+保護管理費×日数の金額徴収、新しい飼主から20ポンド+避妊手術料17ポンド(必ずメスのみ手術をする)の費用徴収、会費、各種イベント、動物愛護関係図書の販売収入、ペット用品及び飼料などの販売収入等々の項目をあげることができるが、大半は本部からの助成と一般からの寄

附などによって運営されているという。

パール所長が是非見せたい動物がいるとのことで施設内の牧場に案内されると、1頭のポニーがいた。このポニーは炭鉱の地下3マイルで25年間働いて現役を退き、炭鉱の労働組合から厚生ホームとして一生の飼育料を受け、ここで余生を送っているという。パール所長は白髪まじりのポニーの顔を優しくなでながら、「訪問客に必ず紹介しているが、日本からの訪問は貴方が初めてだ」と話してくれ、感激で心があたたまる思いであった。

(2) バタシー・ドックスホーム

ビクトリア駅からテムズ川を渡った所に広大なバタシーパークがある。この公園の隣に、立体交差した高架道路のガード下を利用して造られた、200メートル以上も連なるユニークな犬舎をもつバタシー・ドックスホームがある。この施設は、1860年に開設された不幸な犬・猫のための動物保護福祉施設で、川崎市という動物管理センターにあたる施設であるが、ここの民間の愛護団体によって運営され、開設130年の歴史をもつ福祉施設である。

現在、この施設は600匹の犬と120匹の猫を保護して飼主を待っているが、施設の老朽化と市民の要望により大規模の拡張計画が進められ、多くの寄附がよせられている。このホームは、収容される動物の健康チェックと流行する疾病のワクチン接種をおこない、完全な衛生管理体制を確立しており、さらには地域における低所得者の動物のためのクリニックも開設して、多くのロンドン市民から親しまれているという。

私が訪問した時間は開所前の9時であったが、動物舎の清掃中で15名の作業員(全員女性)、獣医師2名(女性)、看護婦8名など、総勢60名の職員が忙しく動き回っていた。

所長のワドマン・タイラー氏に会い、イギリスに動物愛護が定着した理由をたずねた。

「自然が豊かであることから身近に動物との触れ合いがあったこと、酪農国としての存在もあるが、家畜としての役目から抵抗なくペットとして飼われるようになってきたこと、第一次大戦以降、世の中が豊かになったことなどの理由をあげることができ、長い歴史、宗教などさまざまな理由が考えられ、短時間で語ることはできない。いえることは、センシティブな国民であることから、弱者や動物などを保護し、いたわる気持ちがとても強く、趣旨に賛同するとボランティアとして、あるいは寄附というかたちで表現され、このようなことは決して動物愛護にかぎられたことではない」とこの所長は語ってくれた。

施設見学のため外に出ると、平日ともあろうに家族連れや2〜3人のグループが、自分たちの飼い犬を探しに、あるいは新しい飼い主として犬・猫を見に来ていた。こ

こでも新しく飼主になるための厳しいチェックは当然であるが、なんと貰われていく動物は可愛い小犬・小猫よりも成長した犬・猫が多く、しかも犬でいえば大型犬なのであった。このことから、日本人との大きな思考の違いを見ることができた。

(3) ウッドグリーン・アニマルシェルター

ロンドンの北、キングスクロス駅から列車で約1時間半、ケンブリッジの近くのロイストンという小さな小高い丘の町に着いた。地平線が見えるほどに延々と広がる牧草地を車で約40分ほど行くと、牧柵で囲われた建物が見えてきた。ウッドグリーン・アニマルシェルターである。ここは、マーガレット・ヤング女史(獣医師)によりロンドンでの野良犬、猫の問題が盛んに取り上げられたことをきっかけにし、不幸な動物のためのアニマルズ・ケア施設として1924年に設立された。現在、フルー氏が代表者となり、本部を含む3支部の福祉施設を開設するなど、RSPCAにつぐ愛護団体として動物愛護の普及と保護に努めている。またここでは、アニマルワーカー(動物愛護の指導者)を養成し、行政のアドバイザーあるいは会員への専門的な指導ならびに、学校教育現場での動物飼育管理の指導をおこなっている。

フルー氏の案内で施設を見学したが、動物舎は各100頭を収容する空調設備の整った5棟の犬舎に各2,500m²の運動場を併設し、また、同じく各30頭を収容する3棟の猫舎に各900m²の運動場を併設している。動物たちは自由に生活できるよう素晴らしい環境の中で飼育されて、避妊・去勢手術を受けた動物が集団生活をしていた。さらに、設計には十分過ぎるほどのクリニックが設けられ、そして飼育舎には冷暖房、換気、自然光の取り入れ、給水・排水施設等が整い、それらはすべてコンピュータで自動操作されていた。ここで特に目を引いたのが猫舎で、なんと運動場の各所におとぎの国を思わせるような家の形をした小屋が置かれ、猫たちはなんの恐怖感もなく手足を伸ばし仰向けで寝そべっていた。この姿からは、町でゴミ箱をあさり、人に追われ放浪し

自分たちの家をもらい悠々と暮らす猫

ていた猫とは誰も想像できる姿ではなく、彼らもその過去を忘れていたかのようで、思わずカメラのシャッターを押した。

4) 世界のモデル(ミュンヘン動物保護協会)

動物愛護はイギリスばかりではなかった。ミュンヘン動物保護協会(ミュンヘン・ティアシュッツフェライン)は、1842年に個人経営として設立され、現在45名の職員と約1万名の会員を持つ法人として運営され、最も大規模な愛護団体として、また世界のモデル施設として、各国から多数の訪問者があるといわれている。

施設の設備・構造はイギリスのウッド・グリーン、ゴットストーンならびに諸外国の福祉施設のモデルとなっただけあって、ドイツの重厚さと完璧さをもそなえて、しかもスマートさを感じさせるものがあった。ここには、動物約800匹(犬290、猫210、鳥80、馬・ロバ15、ウサギ70、鶏15、キツネ11、オオカミ、モルモット、ハリネズミなど)が保護収容されているが、犬は80%、猫は50%の率で飼主のもとに戻るか、貰われていく。これは川崎市動物管理センターでの犬・猫の返還率(飼主のもとに戻る)とは比較にならないほどの高率で、飼主の愛護の深さを計り知ることができる。また、不幸にも引き取り手のない、あるいは病気の動物、年老いた動物については、ここで生涯飼育保護される。さらに、この協会の動物愛護活動として、ミュンヘン市内の野良猫を今までに約1万匹捕獲し、避妊・去勢手術を施して、捕獲したもとの場所に返す作業をおこなっている。この処置によって、野良猫の増加を防止し、市内の野良猫問題は解決しているという。日本では考えられないことであるが、市民もこの活動に協力し、なにより問題は起きておらず、このことから動物愛護教育の普及・啓蒙が徹底されていることを知ることができる。

2. 自然教育から動物愛護を育てる

…マリーダム教育の森…

ロンドンのチャーリング・クロス駅から列車で約2時間、イギリスの関ヶ原といわれる戦場となった港町・ヘイスティングズに着くと、森の番人と自称するグッドマン氏が迎えにきてくれており、車で町を抜けると海辺に続く森が見えてくる。ここが80エーカーの敷地を有するマリーダム教育の森であり、国の自然保護区である。

この森には、グッドマン氏(獣医師)を代表者として、氏の家族3名と、自然学者のホワード氏、そして6名の指導者(動物学、自然学の専攻)がいる。ここは小学生から大学生を対象に、豊富な自然環境の中から自然保護および動物保護・愛護を実地に学ばせる民間の教育施設である。また、理科・生物などの教科書、その他、教材の作成をおこなうなど、文部省の指定施設でもある。

施設はロッジ風の2階建てで、学校の教室2クラス分

グッドマン氏のお宅前にて：(左)ホワード氏と
(右)グッドマン氏

の部屋があり、壁や天井のいたる所に標本や写真等が展示されている。また、宿泊施設を備え、負傷した動物の保護・治療施設もあり、森での早朝・夜間の動植物等の観察もできるようになっている。

訪問者は個人、家族、グループ、学校のクラス単位等と、授業、調査、研究等の目的で年間5,000人にのぼるといわれ、そして60,000人のジュニア会員がいる。私の訪問の前日、教師に引卒されロンドン市内の将来理科系を専攻するという中学生10名が宿泊して、動物の生態について学んで帰ったと聞かされた。ここでの授業内容については、動物学、植物学(生物全般)とかなり専門的な内容であるが、受講者のレベルに合った方法で進め、しかも自然の森の中での体験として学んで行く理想的な授業方法である。

グッドマン氏と森の中を歩きながら、小学生の授業内容を実際におこなってもらうことにした。氏は、ふと腰をおろすと小さい羽毛を手にとり、「これは何の羽。どこの。なぜここに落ちている」、「この羽はキジ鳩の胸の羽で夏から冬にかけて抜けかわるもので、これをまた小さな動物達がひろって巣に持ち帰り、冬に備え、こうして動物は暮らす」と話を続ける。さらに森の奥に進み、夏の嵐で大木が折れ根をむきだしにして倒れていると、「この木はこのままにしておく、折れた木は枯れて苔が生える。倒れた木は一生懸命に生きようと新芽を伸ばす。芽はたった2カ月足らずで1m以上伸びた。倒れず枯れた木はリスやキツツキ達の巣になる」。また、雑草の前で立ち止まり、「これはあまり知られていない植物で少ない。ぜひ大切にしてほしい。これが絶滅の危機にあるレッド・アドミラルという蝶の幼虫の主食なのです」。赤い木の実を見つけ、「これがピラカンサスの実で、花が咲き実ができ、鳥の餌になる。木の下に鳥の糞がある。これが木の肥料になる」。その時突然、私の肩にレッドバード(雀より大きめの鳥)がとまり、見知らぬ国での緊張を一瞬にしてほぐしてくれた。素晴らしい森で

の体験であった。

このように、氏の豊富な知識と経験ある話から、子供達に夢と自然に親しむ気持ちとを抱かせ、森で傷ついた動物の治療を共にし、動物の苦しみ、痛みを知る中から優しい愛護と保護の意識を育てる情操教育と自然教育を学ぶことができた。

3. 本 来 の 動 物 園 の 姿

…動物園での教育システム…

動物園が行っている社会教育システムと、その実際の指導と実情について3カ国の代表的な動物園（イギリスのロンドン動物園、西ドイツのミュンヘン動物園、フランスのパリ・パンセンヌ動物園）の教育センターを訪問して、学校教育での理科、生物、動物学等の授業の一環としての動物園の存在を見てきた。

一般的に動物園は、本物の動物、希少動物をまじかに見る場、家族の行楽の場としての存在があるが、ヨーロッパの動物園では社会教育、学校教育の場としての位置づけが確立されていた。園内には教育センターが設けられ、そこには獣医師をはじめ、動物学、自然学の専門的な教育者を擁して、豊富な標本や資料を備え博物館のようでもあった。

ロンドン動物園、パリ・パンセンヌ動物園は、ともに文部省の傘下にあり、幼稚園、小学生から高校生の学年別教育プログラムを作り、視聴覚を利用した学習講座と、これらの教師に対するセミナーも開講している。生徒はあらかじめここで教育を受けた教師に引率されて受講する。授業内容は当然レベルによって違うが、幼稚園児に対しては「これなあに」といった方法で動物とのふれあいの授業から入り、小学生に対しては動物の分類、人と動物の違い（人間は動物だ）と性、保護、飼育、観察等で、中学・高校ともなるとかなり高度の解剖、生理、発生学と専門的な授業になる。

このような教育システムは、イギリスのCSE (Certificate of Secondary Education: 中学校課程終了資格試験)、またフランスではバカロレア (高校卒業試験) 等のための学習の場としての受け入れもある。

ロンドン動物園訪問の当日、市内の小学校の生徒10名と高校の生徒20名が受講しており、小学生の授業を参観した。授業は階段教室で20分のスライドを使い、動物の分類をテーマにしたわかりやすい内容で、このあと理科実験室に入り小テストをする。さらに、動物園教師と質疑応答の時間があり、標本や剥製、生きた小動物に触れたなごやかな授業風景であった。さらに、2カ国の教育センターは、教科書の作成や教師用の指導書および動物の飼育観察に関する読本の作成も行うなど、文部省と動物園とが一体となった確かな動物学習の場としての存在となっている。

いっぽう、ミュンヘン動物園では、動物園の専門職員が教育委員会の依頼により外部講師として学校の授業にあたり、また成人学級の講師に派遣されている。この学級は週1回、30名が受講（1～3カ月間）し、野生動物、希少動物の保護、動物の飼育法と病気、人と動物との関係等といったテーマで開講され、今までに20コースを開講し600名の受講者をだしている。このように動物園を動物学習、教育の場とした利用法は3カ国に共通しており、アメリカおよびオーストラリアにおいても同じ教育システムがとられているという。

4. 野 生 動 物 の 保 護

川崎市の北部には、自然の環境がわずかながら残され、そこにあまり人々には知られてはいないが、野生のタヌキ、キツネ、イタチ、ウサギなどが生息しており、必死に餌や安住の地を求め生きている。しかし、交通事故や犬などに襲われ負傷した動物を積極的に保護・収容する施設はない。このような川崎市に生息する野生動物の保護をはかるための参考資料とするために、イギリス全土の野生動物の保護をおこなっている施設である、サマーセット州・タウートンにあるリトルクリーチ・ワイルドライフ・フィールドユニットを訪問した。

電線に激突して保護され、傷跡が痛々しい白鳥

銃で背中を撃たれ重傷で保護されたが経過良好の子鹿

【別 表】 動物愛護意識アンケート調査とその集計結果

質 問	主 解 答	フランス	西ドイツ	イギリス
(1) 日本を知っているか	知っている	34%	97%	98%
(2) 日本の動物愛護は	虐待してる	24%	—	31%
(3) 貴方の国の動物愛護は	良 い	87%	73%	75%
(4) 動物が好きか嫌いか	好 き	87%	99%	98%
(5) 動物と人間の違いを書きなさい	※①			
(6) 貴方と動物（ペットの関係）は	友 達 家 族 何でもない他	43% 26% 30%	57% 19% 24%	20% 77% 3%
(7) 貴方はペットを飼っていますか	い る	83%	75%	72%
(8) 犬に噛まれたことは	あ る	30%	72%	36%
(9) ペットが病気になったら	病 院 へ	87%	79%	—
(10) ペットが死んだら	お墓に入れる 庭に埋める そ の 他	26% 61% 13%	2% 77% 21%	14% 69% 17%
(11) 人間にとって動物の恐ろしい病気は	狂 犬 病	73%	26%	95%
(12) もし動物が交通事故で負傷していたら	病院へ、誰かに知らせる。 わからない	60% 40%	93% 7%	92% 8%
(13) 路上や公園で糞を見たらどう感じるか、ペットの散歩中の糞の始末は	そのまま 気にしない 始末する わからない他	52% 9% 39%	69% 19% 12%	89% 2% 9%
(14) 他人のペットによる迷惑・被害は	糞 そ の 他	39% 61%	20% 80%	3% 97%
(15) 迷い(捨て)犬猫を見つけたら	飼ってやる 飼主を探す 知らせる 愛護団体など そのまま	39% 26% 22% 13%	16% 35% 46% 3%	5% 56% 36% 3%
(16) 動物園に何回行ききましたか	0 回 1 ～ 5 回 6 ～ 10 回 11 回 以上	8% 44% 31% 17%	3% 57% 25% 15%	0% 23% 44% 33%
(17) 動物に関したイベントに何回参加しましたか	0 回 1 ～ 5 回 6 ～ 10 回 以上	30% 70% 13%	0% 63% 35%	37% 37% 26%
(18) 将来なりたい職業は	※②			
(19～20) 家族構成 家の形成				

人里離れた山林の中、20 エーカーに牧場と保護舎があり、オオカミ、キツネ、ハクビシン、ハリネズミ、ワシ、ハクチョウ、カモなどの野生動物が保護されていた。この施設は野生動物の保護、希少動物の保護と繁殖を図るとともに、自然への関心と愛護の意識を普及するために作られた民間の保護施設で、海外からの訪問や学校からの研修等で多くの訪問客があるという。この施設は、今まで訪問してきた施設と同じく、全くの寄附によって運営され、職員は所長のカーグハン氏と保護員のセドン氏のほか4名であった。

この施設の保護体制について所長にたずねると、ワナにかかり骨折したハクビシン、電線に激突して負傷した渡り鳥、巣から落ちたムササビの子、親が死んでみなし子になったハリネズミ、またペットとして小さい時から飼われていたらしく町中で保護され野生に戻れないワシ、そして絶滅の危機にあるバルン・オウル（フクロウ）など、25 匹の動物と 50 羽の野鳥をていねいに紹介してくれ、動物の容態によっては夜間でも泊り込みで看護に当たるなど、強い熱意のほどを感じさせられた。さらに前日、イギリス海峡の東岸、リニー港に油の流着汚染があり、真黒の油で汚れて飛べなくなったハクチョウ 13 羽を RSPCA のインスペクターと共に保護し、1 羽 1 羽、特殊な洗剤を使い汚れを洗い落したという悪戦苦闘の話をしてくれ、油汚染の海にかけつけた時には、すでに 10 羽が死亡していた、と非常に残念そうに話してくれた。イギリスの各地から保護され、そして回復し、自然に返って行く動物の数は多く、その保護施設は、設備などさほど立派とはいえないが、真剣に野生動物の保護に取り組む姿は感動的であった。ただ、カーグハン所長の「少しの土地と少しの資金に大勢の人の理解がありさえすれば保護はできるし、やらなければならない、それができるのは人間

であって動物ではない」、という言葉が心に強く残った。

5. 動物愛護意識アンケート

…ヨーロッパの子供達の愛護意識…

日本とヨーロッパの子供達における動物愛護の意識の

違いを知る手段として、訪問した都市の小学校において6年生を対象としたアンケートを試みた。

アンケート調査を対象とした学校については、正式依頼が難しく、何校かに拒否されるなど難しい条件の中、各国1校ずつ受け入れがなかった。しかし、日本との教育制度の違いにより学年の年齢差（6年生：8～12歳）があり、また生徒数の条件等から統計的に十分なアンケート調査とはいえないが、あくまで参考として意識の違いを見ることができた。

1) アンケート調査校と数

フランス：パリ市立・MIXTE 小学校（23）

イギリス：ロンドン・私立サル小学校（64）

西ドイツ：ニュンブルグ市立・ホルトルフ小学校（123）

合計 211 名

2) アンケートの内容と集計

（％：フランス、西ドイツ、イギリスの順）

別表のとおり20問について、あり・なし、大すき・好き・普通・嫌い・大嫌い、といったチェックと、2～3の語句の書き込み方法でおこなってみたところ、国によって意識の違いがあらわれ、問(7)ではカエル、ハリネズミなどの多種のペットを飼育し、問(13、14など)からは悪い感情をもっている反面、ルーズなことがわかる。また、愛護意識・知識については問(9～12)から想像以上のものがうけとれる。

さらに、(5)※①では、子供らしく素朴な表現で書かれており、(18)※②では、将来の職業について書き込んでもらったところ、3ヶ国ともトップに獣医師があげられ、このアンケートの影響の有無を教師に確かめたところ、子供たちの憧れの職業だと聞かれ、自分の職業を誇りにさえ感じることができた。この調査をもとに今後、日本の子供たちからもアンケートを集め、意識の違いを知る貴重な資料にしたいと思う。

6. おわりに

ヨーロッパの施設を訪問し、多くの人と動物に触れた1カ月の研修を終え、うらやましいほどの動物保護、福祉施設、教育とまさに定着した歴史ある動物愛護を学ぶ

ことができた。

この研修の成果を今後いかにして普及・啓蒙し、日本人にあった豊かな社会を考えると、一方的な押し付け行政ではなく、愛護教育活動として幼児教育、児童教育を積極的に進めることが必要と考える。しかし、日本においてあらゆる機会に動物愛護に関する思想を耳にするが、なかなか地域社会において普及・実践されることは難しく、動物愛護意識はいまだ薄いのが現実である。日本はヨーロッパの動物愛護には及ばないにしても、同じ人間として動物に対し深い愛情があってもおかしくないと思う。子供の成長過程において動物との触れ合い（飼育、観察から動物の親子愛、いじめ、誕生、死などの体験）は、人間としての優しさや物言わぬ動物への労りの心、ひいては愛情、友情、命の尊さなどといった人格形成の視点からしても、情操上重要であることは誰もが認めるところである。

現在、大半の保育園、幼稚園、学校においては飼育舎をもっているが、一部の教師と一部の生徒による飼育・観察にすぎず、愛護教育にはほど遠いものがあり、教育の場において正しい飼育管理、習性、病気（人畜共通伝染病：人と動物とが同じ病原体によって感染する伝染病）等々の問題についても、ヨーロッパの教育を見習った動物愛護教育を取り入れ、動物学、獣医学、自然学の専門教師を教育の場に配置し、幅広い教育が必要と考える。

また、自然保護に関しては地球誕生後、約45億年、生命誕生から気の遠くなるような年月を経て少しずつできあがった自然環境を、ほんの数10年間で破壊していく現代社会において、動植物を絶滅の危機にさらすことは、いずれ我々人類も絶滅の道を歩むことになることはいままでもない。自然から受けるあらゆる恩恵を率直に見つめ、動物と人が共存する喜びと調和のとれた環境の意義をわれわれ大人が将来の担い手となる子供たちに教え、日本では意識として薄い野生動物の保護についても、積極的に取り組むこともわれわれの責任と考える。

私はこの研修から川崎市の動物管理センター、動物公園、その他の教育施設などを自然教育、動物愛護教育の拠点として充実させる必要があると痛感した。